平成２９年度　**学　校　研　究**

１．研究主題及び副題

共に学び、自ら考える子の育成

～つけたい力を明確にした書く活動～

２．主題設定の理由

日々の授業を通し、一人一人のちがいをよりよき個性と捉える心情と、ちがいを生かし合える力を育んでいきたい。そして、他者とのかかわりによって得られる成長の喜びも味わわせたい。やがて社会を担う立場となったときにはちがいを豊かさにつなげられる存在となるように願い、この主題を設定した。

本校では６年間に渡り、「話し合い活動」を通じて「共に学び、自ら考える子の育成」に取り組んできた。これまでの実践を通して、「話し合い活動」によって一人一人がちがいを生かしながら学び合う姿を多く目にすることができた。昨年度は国語科と算数科を中心に、研究の重点として「追究意欲を引き出す課題設定」「学びを確かにするアウトプット」を設定し、研究を進めた。その結果、教師の、課題に対する意識や子ども達の書いたものでその授業での学びをはかろうとする意識が高まった。そして、学んだことを自分の言葉で表現しようとする子ども達の意識も向上した。

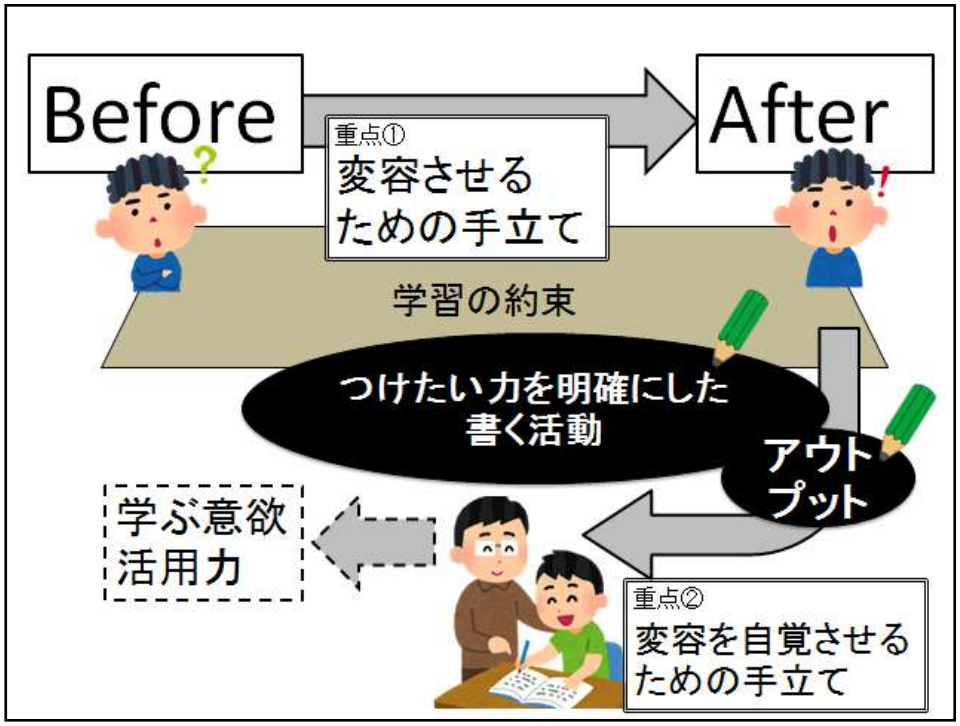
一方で、学んだことを自分の言葉で表現しようとするものの、表現できなかったり、内容が十分でなかったりする子ども達が少なくないことも事実である。「話し合い活動」の中で教師も子ども達も理解できたように感じていても、そうでない場合があるからではないかと考える。

そこで今年度は、学んだことを生かして表現することを本校での「アウトプット」ととらえ、どの子も「アウトプット」できるようにするために、国語科に研究の軸足を置き、「つけたい力を明確にした書く活動」を副題とする。そして、アウトプットに至るまでの手立ての工夫について研究を深めることにする。これまで取り組んできた「話し合い活動」による協働的な学びも大切にしながら、自分の学びを深め、学びの変容を自覚することができるような「書く活動」を取り入れた授業実践を積み重ね、「共に学び、自ら考える子の育成」を目指していきたい。

３．取組の重点

アウトプットにつなげるための手立ての工夫

重点① 変容させるための手立て	重点② 変容を自覚させるための手立て
子ども達が「わかった」「できた」と感じる、**変容の見られる授業**であれば、子ども達は必然的にアウトプットしたくなるのではないかと考える。新しい技能が身についた、新しい気づきがあった、考えに深まりや広がりがみられた等を変容ととらえる。 **単元構成・授業計画で「書く活動」について明記する** 「書く活動」を単元の、または１時間のどこに位置づけて、何を書かせるのか、どんな力をつけさせたいから書かせるのかを明確にして取り組む。	**子ども達が授業で変容したことを自覚する**ことで、学ぶ喜びを感じ、次の学習への意欲につながるのではないか。かつ学んだことを別の場面で活用できる力もつくのではないかと考える。 **比較する場面を設定する** 単元の初めと終末、１時間の授業の初めと終末での比較等の、学ぶ前と学んだ後の、個々の変容、集団としての変容等を、書いたものや記録で比較することで自覚させる。また、自他の比較が有効な場面もあると考える。



4. 取組の進め方

①　「板書で見ましょ！」と「研究授業」での気づきを日々の授業に反映させていく。

＜授業案構想時＞

重点①　変容させるための手立て

この授業で「つけたい力」とは何か、そのために「書く活動」を単元の、または１時間のどこに位置づけて、何を書かせるのか、どんな力をつけさせたいから書かせるのかを意識して構想し、指導案に明記する。

重点②　変容を自覚させるための手立て

どのタイミングで、何と何（過去の自分と現在の自分、現在の自分と現在の他の子…）を比較する場面を設定すれば変容を自覚させ、自ら学ぶ子の育成につながるのかを考える。

＜授業実践後＞

「書く活動」と比較する場面の設定について、子ども達の書いたものをもとにふり返り、成果と課題を考察する。また、課題が見られた部分については改善案も構想するようにする。

各自の「板書で見ましょ！」と「研究授業」での気づきを学習指導部会でまとめ、研究通信として発信する。

②　アンケートによる分析

子どもたち同士が、自分たちで関わり合って、支え合って追究できるように、よりよい人間関係が

築かれていなければならない。そこで、子どもたちにアンケートを実施し、実態の把握と改善に生かしていく。

③　研究のふり返り

１，２学期末のブロック研で、「取組の重点」「学習の約束」について、「板書で見ましょ」や「研究授業」、「日々の実践」を元にふり返る。